近世説美少年錄 五編壹

へ13
3567
21

へ 13
3567
21

曲亭翁口授編

近世説美少年録 五冊

一陽齋豐國畫

文榮堂
群玉堂 精刊

細田大學 図書館
昭和 34.6.3 受入
藏書

新局玉石童子訓下帙五冊自第二十六回至四十回總目録

○巻之三下冊　第二十六回
復讐財楽六郎喪多財
○巻之四上冊　第二十七回
成勝通能遊歴赴東路
○巻之四下冊　第二十八回
晴賢睡松下被蚺蛇吞
○巻之五上冊　第二十九回
秘罪過晴賢訪阿鍵
小忠二怒逐朱之介
○巻之五下冊　第四十回
非情根柢妙美奇瘡
刑餘細人迭驚機會
晩稲拂袖獨正閨門
吾足齋筆盃詳往事

近江判官
高頼
将擇福艾
危而後安
夏賀典膳
政朝

夏賀志賀丞
政賢
信夫晩稲
羊岡人

戰者必傷
勝者自強
高嶋宜久
好純
吾足齋
延明

錦上添花ヲ
有
雪中餽炭幾
稀
措名
福富小忠三

彼岸そくさい
雕窩老
寺僕柿八
てらをとこ
隱沼女僧
うれぬのあま

信夫老苧
三池宿六
みいけのやどろく

題蓑笠先生隱居　　関　弘道

蕭蕭脩竹遠茅廬　雨笠烟蓑一老漁
紫石潭頭閑下筆　釣来新著幾篇書

関賢才者二世與子同好友也童年嗣父祖箕裘而善書且嘗詩云劣孫與邦鬻得此詩即呈閲於予吟誦之間唱歎有餘蓋才之長短不由老弱譬彼我之年歳相距六十有一于茲老而顧已似有庭徑矣彼出藍之所稀自今而後上達可知時童子訓第二版刷人告成因而叨取以録於簡端餘紙

弘化二年如月清明前一日　著作堂老禿

東都　曲亭主人口授編次

第三十六回　善悪少年月下ゐ雌雄を争ふ　夛財を復して柴六郎夛財を喪ふ

前回十三屋九四郎が店舗の段落葉乙藝が會話ゐ物ご言を磬さ孫ば。重くおゐ文と續て都説登時末朱之丞野十玉の夜ゐ紛れて久ーく外回る有る。店の柱ゐ身を倚て既ゐ穴稠聞おくりける落葉乙藝親子の再會其過去来の話説ゐ胆を淡き且呆れく肚裏ゐ思ゐ。誰ゐ知るべ那乙藝ハ俺も亦孫ら。那名おくと呼知らる異母あそ女兄品る。小夏えーハ最奇ゑ然でハ大和の阿懐も実の甚兄ゐ心引れて。主張始ゐ同ゐかゑ。俺今阿容々々と恥と刃心ゐて裏面ゐ人そ哀ゑ。那金一百九十五両ゑ送ゐ俺ゐ返ゑ。僅ゐ五両十両の仂賦と

貰んとて愁に面出して脂取らるゝ長談義せらるゝ。愚ハ鈍くてそハ智恵なき
者に似たり。又前もハ九四郎が金五両を来六に濟して。是と俺とを赶せんとせしか
ど。俺這里へ来る途にて遭ざりければ其も益なし。非如今来六が折よくかへり来
ぬるとも更に寡の知れたる五両金。徃方定めぬ俺逆旅の路費に足べくもあらぬ所
詮窘し人を頼みて其懐を當にせんより。元自那財囊を掻攫ひて走んに西も
東もあれ世を渡るに本錢あり。噫嘻令人の恩を思ハぬ非義の本性計較
既に定りて悄地に四下を見かへるに這時十八日の月出て外面ハ稍明なるに目義ハ
抬筧子の鳥邊に朝夕暖簾を上下する。鉤竿の長なるあり。是究竟と會点して
閑送したる戸の間より。裏面の光景を覗ふに落葉来乙藝ハ[illegible]
物語に外を見久る暇なく九四郎も亦慷慨と眼を閉て其会話を
うち聽て在りしかバ。朱之丞ハ便を得たり。とうち含笑々々鉤竿を徐々と刺伸して。

落葉が投捨しる那財囊の登框の頭に在りしを。闇に方より引攬て悄地に
奪拿らせしを。介程に峯張来六郎通能ハ郷尚に朱之丞を赶んとて六市四揔を
従へて連りに路を走りて。是日下晡の時候浪速の申明亭に造りて悄地に
其頭の人に向ふに既に朱之丞ハ追放せられて那地へ赴けるハ知る者なし。且其時
剋を尋るに両三晌已前なりしとなりて。力及ばず只得其首より思ひ捨て。亦
復路をいそぎて住吉の里へかへり来ぬる程に。六市四揔も壮佼なれども因窘疲労
ある故に還さハ路を走せず。世話人許立よりて抬息をもべられとて。途ゆく来
六に相別れて彼来六ハ身單にて只管にいそぎて立も憩ハず既に日ハ暮されども。い
まだ月の出ざる時候十三屋の店前近くかへり来ぬるに夏夜なれバ戸を閉果さず。
裏面にハ老女客ありて。九四郎乙藝と額を合して。うち譚ふ聲幽にして只許りて
左右なく入らず。只那客のかへるを。抬筧子の鳥邊に人ありて窺聞くる者に似

たり。甲夜間ゐれば見えざる糸ど。老女客の伴當歟と思ふのみ。他も亦蚊ふ螫るゝと猷ぎし。潜びて在るハ疑ふべし。是嚇砂児ふあらぎやと猜ゐ敢て驚かず。扨ゞ儘庇間ふ身を潜して内外の容子を覘ふ程ふ身ふ寄る長脚蚊と挿ふ猶覘ふと一晌許料らぎ少知る落葉乙藝の親子の再會長談の奇く聞ける幾條ふ感嘆ゐてあり。程ふ夜ハ既ふ初更ふ過て月出て影涼く祖端近く飛螢ハ風ふ撲れて墜るもあり。朱六ゐ今這月の米ふ就て悄ゐふ頭を出して件の嚇砂児を熟々視時他ゞ四阜面せ。拭の風ふ吹れて落ーかハ疑ふべくもあらざりけり。昨日も今も陣館ゆ。既ふ面を見知ゐ者ふ朱之丈くけ是ハ心悄地ふ訝て原来他ハ要ある故ふ潜びて居るゆをあらむぎらん何とてや内ふ入らぎりけると思ひ佐く聲を被ぎ猶も闌窺る程ふ朱之丈ハ是を知らぎ悄地ふ鈎竿を刺伸して件の財嚢を引掛て竿を繰り引ゐるふ框の邊ハ燈火の光届ぎて暗りけるふ

落葉乙藝九四郎ハ心其里ふあらぎとハ盗児あるを毫も知らぎ只峯張り来ゐ六のゝ見ると既ふ分明ゐれば且驚且怒ふ堪ぎ性起るを推鎮めて思ふ憶無慙やゐ朱之丈奴ゞ賊心ゐ後間ふ事をせぎとも明々地ふ哀ムづ落葉の刀自の慈善ゐ俺舎兄の義侠ゐ財嚢の金子ハ左まれ右まれ盤纏の為ふ幾十金百金とも惜むとゐ。取せざるとゐある。幾を恥て盗を恥と世ぎ愚物の本性憎むべ。推捕ら捉懲ゐて目今金子をとり復ぎ俺かゐ来ゐ甲斐ハゐと尋思ゐ又ゝ思ハ這里ゆ那奴を捉懲して二包一財嚢ゐ金子を復ゐ易れども然ーてハ那刀自の慈善ゆも悖ゐ且俺兄の為ゆも恥ゐ一要時遣過ーい這頭を離れてせん術あり。と深念ゐ猶身を潜めて在りける程ふ朱之丈ハ財嚢の金子を既ふ盗合ゐ時落ゐ拭合ゐ揚ゐ。翼面ゆ窃歩ゐ浪速の方ふ逃去ゐ朱六を吐嗟

とぐろ巻く蚓く庇間より立出て相距て十間許月を便に跟くやく善少悪少道異なれども走る同じ夏の夜に吹風涼き更初て人定近くるに付て然れば這時十三屋の店内に落葉乙藝が今昔の話説稍果しかば九四郎い惆然る頭を抬げ膝を找めく更に落葉に向て云ふ。離合時あり。禍福齊く至らぬ抑乙藝が不幸る。奶々に相別れより今十あまり九の春秋を歴て憶りるに再會の本意を遂しに俺二親の素懐に稱ふく已も深く欽びるり是併慈悲積善と宗とするの御身の老後を神佛の憐ませの賜る感應利益にそあらん。然ばや。御身年来苦労して守育のひる姪女斧柄刀祢とやらの孝順にて短命るける其代に年五より業て生死ども知るよりるり。實の女兒と云るのに斧柄刀祢に及ぎども他も孝順の心るるんや。斯に俺九四郎も今ようして御身の女壻と大和津國同郷るられど一臂の力を盡さべ。心つく思ふ

のに祢かと詞徐に慰むれば乙藝も亦俱に流る。瓢形の天鑛金の地に埋て金の恩返もよりるに玉鉾の身の薄命といふ。二十の上と七まぐ歳長て今料らむも環會まりに過世ありける幸るら。幷も九歳の秋よりで養ひの恩淺りるね。這里に一故の家主人御夫婦の慈悲微りせば今まの欽びあるべや。是に就ても痛まに家尊の大人木偶めの東路に迷る人の數に入りに山の恨にはよと泣つくと泣沈めば落葉も涕どうちかそ。現に其ゆえ親子兄弟うちも揃て仁義の家に養れぬる汝の果報過世あるべ。皆九四藏主御夫婦の慈恩とぶもあまりあり。俺身るとぶ及んや縁に觸ぬる身の幸に猶願るるとぶ九四郎に向て嘯女壻の刀祢斯いで卒介に似くれと知らるく如く大和る。杜木の家に續ぐ者る一。朱之丞とび義絶ちる。斧柄が送ぬ孤る玉五郎あるとぶ。他に生れて五十日に至ぬ赤子るれば憑しかるぞ辟言び水の上る泡に似る。

非如成長ぬるとも。久後短ク老ゲ身の。よく後見とまべくもあらぢ。願ふ御身ゑ藝と倶ふ上市ゐる家ふ移り来て。杣木の跡を嗣ねか。豪農名家ゐる共二十町八反の田園あり又年毎ふ伐出ま山の林も少ゐかれば衣食ふ物と人ぐも侍らぢ。然らば奴家い隠居ま。佛ふ仕まりてんとの毛を憑ミ侍るのことのつまく九四郎沈吟ゑ。そも亦要あるゐ。必や軽諾い信寡ゑと古語ゆいへ。ゐるまく今即坐ふ決定の答ふ及ん勿論俺家い幸ふ弟采六あり。他い武士ゑ武藝之親の後と嗣ふ足れり。其頭い後安けれども。己が隨意世と渡る九四郎ゑ分際ゆく熟れぬ農家の一世帯と。よく羨嗣ぐべくもあらぢ。俺身い左まれ右もあま。便寡ゑ御身の為ふ異日乙藝とまあるまべ。幾までも留在らま。高量敵ふ夫ゑ。便宜い只ゑの毛のまぢ御身い又遠からぢ。一個の孫と侍るゆべ。開い乙藝ふ問ゆれね。とゐれて乙藝も倶ふ安ゑ。俺身良人ふ仕まり。十稔近くゐ

ぬと。子とゐ者い汲ぐ。ゆ今茲い春より身重く做りて三月四月ふゐりける程ふ折ゐら思いけるゑ禍鬼起りて稍久く。獄舎ふ繋れゐ。必傷産まふゐらんと思い々胸安ゐらざりーふ肌膚ふ撕ゐ護身毒裏ふ藏めく深信息ゐ。長谷清水の両觀世音及除厄弘法大師の御影の利益ゆ。あり。俺身いゐらん胎内ゐる赤子さ差あらぢかと。出ゐふ落垂ふ欲ぢて。吁ゆぞ。ゐらんゆい俺身ゆ亦子孫あり。喃九四郎主諄ゑい老の癖ゐ。御身耕ー耘る技ふ沿熟れぎとそもけあらい。老女の咱ゐらゑの年来傭作ゆ。人並ふ秋の登を汲ゐ。いゐぐ乙藝共侶ふ杣木の家と嗣ゐ。其子宝を大和へ移りて久後いゐく安ゐ。ゆべ。開を乙藝のと召合ゐて御身獨宿ゆ。俺心何ぞ安ゐ。ゆべ。いゐぐと請談ゐれば。九四郎頭と傾けく。這柳店い俺親ゐ。讓ゐまてゐふあらぢ。六市四摠ふ任用せく。俺身大和ふ

寝住とも。斗々左も右もの多ゝら。明日又柔六四郎腋子ゆ告く商量ゑそ後ゆ是非と定めいろ。と答る折ゝう杜四郎い咲ゑゑ奥ゑ出て九四郎乙藝と呼てゆ。夜い深くゆ店の戸鎖く客人と納戸へ伴ひぬいぞ。柔六哥々が今までもかゝり来ざるい心許るゝ。猶戸鎖さぜゝて族ぬいぞと問ふと九四郎ゆあゝ。古柔六ゑ遅くとも六市四摠と倶ゝゝれば他ゞ上い後安ゝ。且這方へと傍ゆ召ゑく更ゆ落葉ゆ向ひてゆ。御高ゆも既ゆらけゝ。ゑの少年い俺故女兄の腹ゑりける大江大人の蔭子ゆそ。杜四郎成勝是ゑり。這回柔六と共侶ゆ朱之丞乙藝ゑの疑獄と解ゑける一人ゑりゑと告れば落葉い席と譲りて斗々ゑゑ折ゆ拝面ゑ待り奴家い乙藝の實の母大和の落葉で侍るかゝと名告と四郎いうゆゆ。咱ゆも甲夜ゑり奥の間ゆ。御話語の條々と送もゑく洩聞れば感心の外いゆ。俺も亦九四郎柔六の外任ゆいへとも。柔六と弟兄の思ひとさへ做ゑ者ゑるべ以意せらるべくもあらぬ。やよ嫂々更蘭ゑ。ゆ。奶々いさそゑ冷やゑゑん納戸へ伴ひゑゝ。とゆべ乙藝い黙頭く。然へ奥へ臥章と儲けく母と休せ侍りてん。喃奶々甲夜ゆ不如意ゆ焦燥ゆひけん投捨られ。那財嚢い其頭ゆとをゆんぞゆ。今ゆ納めぬいぞや。とゆゑゑく落葉い心つゑく。寔ゆ然へ介ゑゑゑ平生ゆい鏹一文でも棄べうい思いざりゑゆ主人夫婦の方正さゆ強難く性起りゆけん一百九十五両ゑる財嚢と漫ゆ投捨ゑい歳ゆ似げゑゑ短慮ゆく。傷痛く思れけん俺後方ゆゑるべゑゆ乙藝看一看含りてよ。とゆゆ乙藝い行燈の灯口と其方へ引向けて。身と起ゝく左右と件の財嚢と索るゆ。あゆべくもあらぬ。杜四郎も指燭ゑて店の四隅履場箱招牌の蔭までも漏ゑ隈ゑる。求猟れとも。那地ゆゑけんゑとゑけれ落葉ゆゞ後悔ゆべきゑ。九四郎眉とゑく頻単ゆて。原来外面ゆ盗見ありく

名氏

楽六ホ逐れて
朱之介夜
財嚢を擲つ
朱之介
るく六

事ゐ紛れて撥攫ひけん。甲夜ゑ殊ゐ輙くられければ漫ゐ風を貪りて。店の戸をこぶ一閉送したる。由断ゐ大敵脱落ゐけりと。悔恨めば。落葉ハ連ゐ嗟嘆し。金銀ハ上ゑ御宝。聊人とも受戴ゑく。弓用ゐまじゑ物ゑらぬと。誰も知らるゆゑゐ薄情婦女子の胸陜く。悲泣ゐ心狂ゑくてや。苟且ゑぐら二包の。金子と疎忽ゐまさ。ゑハ是まで覚ゑゑ俺身の失誤左ても右ても那金ハ無益ゐ喪ふ時節ゑめ。やよ乙藝四郎腋子もうち捨く措ゑ。制められても疑ひ解ねべ乙藝杜四郎ハ慰めく。世の常言ゐ七ゑび索れて。後ゐ人を疑へとゑふとも。われびとそ。迷ふゑ燭と續更ゑ同処を幾番も索るかひゑるゑりける。話分両頭。介程ゐ峯張楽六郎通能ハ末朱之丈ゑ後と跟てゑくと約十町許。既ゐ住吉の里と離れて。右ゐ刎ゑ。左ゐ小隄防あり。逃ゑ岐路ゑとゑければ。ゑ究竟と去向と揣りそ。脚と蹴めつ。聲高ゑふ。盗児ゑと。喚禁れば。朱之丈ハ驚ゑゑら。後方と見ゑる程

ゑもあらせぢ。楽六又蚯く跳蒐りく。項髪捉て動せぢ怒まる聲と震立て。刑餘の鑑ゑ児朱之丈陣舘ゑそ面善ゑる。峯張楽六を忘れいせ。剛才十三屋の店前ゑそ。伜ゑ竊ゑそ走り逃る。財嚢の金子とゑ復ゑんとそ跟て来ゑと知らざるや夙く返せと懐へゑと刺入れて掖出ゑ。財嚢と楚と含ま禁て。喧ゑ。前髪猴子。ゑの金二百九十五両ハ俺大和よりりそ来ゑる。俺物ゑれば俺物ゑを。伜ゑ干る支やゑ。盗児喚り外聞ゑ。ゑ放ぢぢゑと。挑含ゑりく。逃んとゑると楽六ゑ毫も透ぢ。肩尖抓て。掖戻ゑく件の財嚢と捉を放ぢ。朱之丈。自得の白丁術を盡て。挑争ゑ一生懸命。財嚢を後方へ投退ゑば。楽六ゑく怒ゑ堪ぢ。身ゑ両刀と帯ゑる甲斐ゑ。敷ゑ果ゑハ易けれども。然ゑて亦落葉の刀自の歎ゑやゑらんと思ゑ可ゑ。敢其本事と盡ゑば。一霎時他と疲労ゑて。拉んと思ゑ。柔受々々挑む程ゑ天ゑ雲の雨催ひ

今暁明る夏の夜の月を隠し〳〵朦朧と忽地暗くなりふける。浩処に一個の行客年齢を四十有餘。身ゆたに單衣を袴折り〳〵上に重縹の麻の雨衣の。身半なるをうち披て腰に短き両刀を跨まべ。是則武士なるべ。頭に戴く竹皮笠脚ゆへ脚絆草鞋の。打扮さへに精悍き。故ありぬべき夜の行に伴をも倶せず只一人住吉の方よりの〳〵歩と又蜘めく来ける程に今柴六と朱之丞が挑角ふと遥に見〳〵ち驚き近づき来て相距と一丈許。勝負什麼と覘ふ程に月は忽地雲隠まる。四下小暗くなりしかば又只件の行客は慾に心や動けん。竊に歩まく找ミ出く。今朱之丞が投とりける。財嚢と左右と搔捞りく。金揚試に重けまべ。憶ぬ莞と小と微笑く。ゐまく紐を解開て那二包百九十五両の金子をのく懐へ楚と夾めて又搔捞に恰好小石両箇あり。是究竟と搔含りて。悄地に財嚢

へ入替く故の如くに紐さへ結びく。ありける処へ図にて又無く那身を縮めて。往方に知らざりける。両虎食を爭ふ時狐其虚に乗るとは古語に現はれる。故然に這方の両敵を。迷に是を見ぬ知らぬ猶も爭ふ。八月の天の月の雲霄く。景復鮮明えけまべ柴六是に便宜をなく既に有り。朱之丞と。耶と聲かけく投〳〵かを朱之丞は肋手りつ。蟷子の像くに張く。亜ゆを起も沼ぎりを。柴六透さを登〳〵蒐りく。背と踏締て動はぬ勇る聲高ゆに。やそれ朱之丞思へ知るや。那金百九十五両は。你が大和よりのく来ると又ども。原是浮世の刀自の慈善なく。沙金と唐布を買せんとく。你に遮與者〳〵出処あるまべ。今朝浪速の陣屋。落葉に返しのひ〳〵よりを。你も甲夜より竊聞〳〵。必や定知らんと。とくも那折に。你刀自に對面して。明々地に哀乞ぐ。素より刀自を慈

善の人なり。時宜ふりて那金子を。伜が盤纏の為ふとく取らるゝを
あはれふ何とぞ竊そと走とる其賊情を懲さんとそ俺這里まで跟
よろう。今那金子を合復して落葉の刀自ふ返さまくを。俺身の慾ふ欲
ふ。ものをらんそ憎むふ勝る伜が賊心有恁るべしとふ思はざりけふ。俺兄九四
郎の事我依る。伜ふ舊恩ある故ふれども單追放せられしと殊ふ不便ふ思
ふの故ふ金五両を家員して。俺ふ課せて追せふ時後れて及ねば日暮て徒ふ
かへり来ふけ。十三屋の門傍ふ。伜が甲夜間ふ立紛れて裏面の容子を窺
居るを見出しれども訝しさふ聲をも被ぎ裏面ふも入らぎ況や件の金
五両を遍與ぶべ時宜ふらねば吉文の茲ふ及ぶのみ。俺兄の好意を空ふ
做さんいさとゞゆく。落葉の金子を合復さへ則是公道。俺兄の既に
偽へ取まふ人情公道と人情と両ふ〻〻劃べ〻〻ぎ。伜這茲を辨知

今よりふ〻〻ふ新ふせよ落葉の刀自ふ義絶の堺えふの故ふ讐断せらるゝ。
大和へふ返されぎ俺嫂乙藝ふ義絶の弟なり。十三屋へ立入るべ〻〻ふの茲を後
まで忘るゝと思ひの隨ふ罵懲して却懐と搔拐て紙ふ包し金五両を開ふ
儘ふ合を出して卒とむるふ朱之介の頭へ托地と投付與へ〻〻。そが儘此一退
紛ふ月と燭ふ四下を見るふ朱之介ふ投退けるふ財嚢ふ故の儘ふして後方ふ允
尺の間ふ在り。朱六是を合上て沙うち拂ひて懐へ夾めていそ〻夜の路十三屋を
投てかへりぬく程ふ十八日の月影も真夜半時候ふるりふけり。小程ふ朱之介頭を
鶴一身を亀ゆく屋四下を見うへるふ朱六ふ故の路へかゝる西れけんゆくぎるりふかば。
ゆ〻〻ふ身を起して。朱六ふ投與へる。金五両を搔合りて包を開れ數へ見て嘆
口氣して其金子を包て先犢鼻褌へ結着ても東西足らぬ身の往方ふ定
め難〻。只詩々と咳くゆう。折角物せ〻金二包を朱六奴ふ合復されて其損料

中々五両金是と落葉と乙藝もが断縁金ゆゑ廉けれども斧柄ゆゑ産後ゆゑ身故りて生まれ赤子ゆゑ悲みと落葉が口説き愁歎詞と竊聞あるもあるべゝの金子の竭くる比ゆゑ悄地ゆゑ大和へ赴く又物ゆゑ時宜もあらん只是星霜を経て好も反も七転八起ゆゑ起ねば男子ゆゑ故先京師まで退いて せん術あらんと獨言ゆゑ胸逞しい虎狼の本性臂と膝とゆゑ塗まとる壤と拂ひつゝ拂磨りて身を起こゝ悠々と東を投ゝ立去ける迹ゆゑ聚鳴虫の聲土旺中央ゆゑ立秋風ゆゑ戰ぐや提防の細芒も招ざべゝ反人の一進一退出没不測の久後も猶怕るべし。案下某生平説當晩十三屋の店内ゆゑ乙藝杜四郎ゝ財嚢の金子と素難ゝ精疲労らして竊れけん と思ふ絶ゝ店の戸を鎖んとする折ゝ外面より来ぬる者あり。是則柒六ゝ近つく隨ゆゑ声を破て嫂々貝今ゝ帰ゝ待ゝ甘里開ゝゆゑ乙藝も杜四郎も噫遅ゝ待不平ゝ疾這方へと閉ゝ開ける戸を又一枚推開けば柒六ゝ働と找を入りゝ坐して九四郎ゆゑ向ひてゆゑ。御爾ゆゑ小弟ゝ市四郎と共伴ゆゑ走りゝ申明亭ゆゑ造りしゆゑ朱之丈ゝ亭午の時候追放されゝ とゝ言ゝのゝ時も後れ往方も知れねば戸得ゝ待ゝ来ぬる程ゆゑ六市四郎ゝ疲労ゆゑ堪む世話ゝ許止宿者。明日参らゆとて別れゝ是ゝして俺身単日暮ゝ這店舗頭生で既ゆゑ火ゝ来ゆゑ又不慮のゆゑ見過しがゝて裏面ゆゑ入ゝ ぎ其儀ゝ後ゆゑ亶ゝさゆゑ。と告るを九四郎ゝ うち笑ゝ開を何ゝ知られども這里ゆゑ甲夜ゆゑ賊難ゝ。そゝ今急ゆゑ告ると雖も益ゝ這客人ゝ和郎も嘆知る那上市ゝ落葉の刀自ゝ乙藝の實の奴ゝ今宵不測ゆゑ知ゝ ゆゑ柒六恭ゝ落葉ゆゑ向ひて口誼と舒べ落葉もそゝ藤と找ゝ初 面の教びと盡せ詞の露の間ゆゑ乙藝ゝ店舗を戸鎖果ゝ杜四郎と共伴

うち向ひて。甲夜ふ落葉が喪ひくる。那財嚢の金百九十五両の事云云とらく説
るを。柒六ども聞もあへむ。其儀ハ咱ちよく知りくる。今詳ふ説示さえ刀自も長兄も呼あへ
其故ハ箇様々々と甲夜ふ末朱之丞が這店頭ふ潜び来て。主客の話説を竊
聞きて。財嚢の金子を竊合る時柒六ども闕窺居り。推捉へ懲しめ金
子を合復さまく思ひかども然して。又落葉の刀自の為ふ妙ならぬ。朱之丞が
竊を知て。浪速の方へ立去折十町許跟ふ。如此々々の地方ふて。喚禁め厮
鬪ふて思ひの隨ふ投伏て。件の財嚢をとり復あつ。九四郎が合せる金五両を
投與へて。ひの来ふけ顛末を。今見る如く説誘りつ懐より其財嚢を合ふて
落葉ふ返さゆ。九四郎落葉と首ゆて。杜四郎も乙藝さえ勝の技むと覺
ふまでふ。俱ふ感嘆きりける。當下落葉いと羞なる色あり。九四郎乙藝ふ向ひて
宣ふ。這金子の失るハ朱之丞が所為ならば。然ぞり惜むべくも佶らず。一旦

他ふ取せる。金子ある者と明々地ふ。乞ひて後間ひ事とあられば。冥四討謂回
柒六主ふ。とり復されける鈍まり。ひよとのひく財嚢と合ふ拾まば。九四郎急ふ推
禁めて。親ひ中わも念の為ふ内と閲して受合ゆと心屬れば。然へと合く財
嚢の紐と解開ひて。合出さ二包の金子ふいあそ小石へ是ハ什麼とぞりふ。
呆れてやとう投出せば。九四郎乙藝杜四郎も。俱ふ訝る斉ぐ中ふ柒六ども驚そそ
且恥且悔てゆ。原来風くも朱之丞奴が。財嚢ふ小石と容易て偸と欺ひ
るとらん然とハ知らで疎忽の態儛。ひ鮮くたゆも面目ゆ。那里ども赴蒐て。
金子合復さでやハ已んぬとのひくも。刀と合て身と起さ。九四郎ども喚禁
めく。柒六ども労きて功ゆ。和郎幾里赴ふとも。逃る者へ路と擇まず他
虚ゆと和郎を俟んや。敦圉くとも今ハ要ゆ。惴ぞふ仔細と告よかとのられて
柒六嗟嘆ふ堪ず。姑且て答る。現ふ懲ゆ今ふ身の非と飾るふ似れども。

楽六を制めて九四郎意見を示す
楽六
九四郎
おちた
九四郎

朱之仆が那金子と竊盜一首より俺閼窺て由断せざ升ば儘迹と跟発て。投伏て這財嚢と。とり復ち一終まで他いふ者て這小石と容易る暇あらず但桃角へる折他財嚢と投退一ふ照る月猛可ふ雲隠れて。一雲時暗く做一かど元れる久表と出あらば。雌雄と爭ふ折事ふ三面六臂るべ他何ぞの暇あらん。然る科玉を要せんや。是ふ由て是と思へ。這小石ハ朱之仆が竊盜ざる以前より財嚢の内ふありける狀其ゆゑとふ時ハいよ〳〵奇一くまもく怪一斯と知らバ這店頭ぞ朱之仆と推捉へて。財嚢とり復ちべ一ふ落葉の刀自の心と汲て地方と易た所故ふと照据人ある事ければ俺分説も間允ふ似て。悔恨のと考てけりと唱言ずく陳ぶれば乙藝杜四郎も慰難て左あらん右やあらんとふ人のこ。倶ふ疑解ざりけりこの段文猶ヨケれバいまゞ説も盡ちべ〳〵又巻と更て下回ふ解分ると聽ふかー。

新局玉石童子訓巻之三下冊終

文海堂藏